

---

**預言と運命の詩**      **光の章**

沖田 光海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

預言と運命の詩 光の章

### 【Nコード】

N6272R

### 【作者名】

沖田 光海

### 【あらすじ】

兄のようになりたい。

幼き頃から、そう思っていた16歳の少年 トーヤ

ある日 兄の助言で、紹介状片手に 兄貴分の大鎌使いコウハと

トーヤの恋人 ルナと共に帝都の最強戦士策士チーム「ラメド」の

一人である青年 琳の下で修業することになるが……

## 登場人物紹介& a m p ;用語紹介(前書き)

この作品は登場人物が多いので、登場人物紹介を設けました。

他の作品一(長編またはシリーズ物)で登場人物紹介(または用語紹介)がほしい方はご連絡ください。

小説の進行状況によっては、書き直すかもしれません。

## 登場人物紹介&amp;用語紹介

### 登場人物

・トーヤ⇨レーシュ

名前：トーヤ

姓：レーシュ

年齢：16

性別：男

Data

過去の大戦の英雄戦士、アークの弟。大事なものを守るため、過去の兄のように強くなりたいと心から願っている。

好奇心旺盛で、分からないことは周りに質問する。

吸収は早い、忘れるのも早い。だが、自分の興味のあるものは絶対に忘れないため、情報が偏りがち。

・ルナ⇨ダレット

名前：ルナ

姓：ダレット

年齢：16

性別：女

Data

トーヤとは恋人同士に当たる。思ったことは大体口にするタイプ。治癒魔法を扱うヒーラー。

体力は普通の女の子にはあるけど、実戦で先陣切って闘えるほどはない。

・コウハ⇨アレフ

名前：コウハ

姓：アレフ

年齢：21

性別：男

Data

トーヤの兄貴分で保護者代わり。片手で軽々と大鎌を扱う。

挨拶代わりに女性を口説く女好きで、ルナに呆れられている。トーヤに女性の口説き方を教えては、ルナに魔術で殺されかけるが、すぐに復活するある意味超人的な肉体の持ち主。

・セフィル＝アスター（霧亞 琳）

名前：セフィル（リン）

姓：アスター（キリア）

年齢：22

性別：男

Data

本名は霧亞琳。普段は偽名であるセフィル＝アスターを名乗っている。その理由は彼の過去と何か関係あるようだが…？

冷静沈着であり動じない性格で感情を表に表すことがあまり無い。22歳の男性であるが、極度の童顔に加え女顔なため、外見は15、6の少女にみえることを気にしている。

ラメドの一人で最年少。

ファイアル＝リクロード

名前：ファイアル

姓：リクロード

年齢：34

性別：男

Data

通称ファイア。セフィルの師であり、上司でありともに闘う仲間でもある。

氷の魔術を自在に操る。  
ラメドの隊長。

フォンル＝リクリード

名前：フォンル

姓：リクリード

Data

通称フォン。ファイアの弟。軍人に似合わず、心優しい性格。  
後方支援のエキスパート。  
ラメドの隊員。

アーク＝レーシュ

名前：アーク

姓：レーシュ

Data

トーヤの兄。十年前の大戦に参加し、“不思議な力”で、魔物を蹴散らし、勝利を収めた。

霧亞 玲

名前：レイ

姓：キリア

Data

セフィルの姉。アークの婚約者<sup>ファイアンセ</sup>である。勝気な性格で、男勝り。  
十年前の大戦に参加。恋人であるアークを支えた。

用語

大戦

この物語の約20年前に起こった戦争。

トーヤの両親率いる帝国軍と、クリフトル率いる魔物軍の戦争。  
古の力を使い、帝国軍の勝利に終わった。

コフ

過去に滅びたとされる種族。言霊という力を扱う。

琳と玲はこの種族の生き残り。

寿命が長く、18〜20くらいまではあまり人間と変わらないが、  
そこから老化が止まり、長い間若くいられる（完全に止まるわけ  
はなく数十年したら、だんだん年をとっていく）

個人差があるが、魔力の強いものは、年をとらないらしい。中には  
ほぼ不老不死に近い者もいる。

ラメド

帝都の最強部隊。隊とはいっても、たった7人だけで構成されたい  
わば、チームのようなもの。

トーヤの祖父が脱退し、セフィルが入って以来6年、隊員に変更は  
無い。

## プロローグ

> i 3 0 2 9 3 | 3 8 8 9 <

今から十年前

この世に大戦と呼ばれる、種族同士の、争いがあった。

いつしか、その争いは、俺の兄、アーク率いる帝国軍と、異端児クリフトル率いる魔物と異種族の軍の戦いになった。

異端と呼ばれる魔術で魔物を生み出し、それを率いて戦うクリフトルの軍に人々は、為す術無く敗れると思われたが、帝国軍が魔物に対抗し、古の力を扱い、帝国軍に勝利を収めた

大戦の激しさ故、自分の持つている力以上の力を使った兄さんは、その無理が祟り、古の力をあまりあつかえなくなったが、人々のなかで兄さんが帝国軍を勝利に導いた英雄だということは、変わらない

今は田舎でゆっくりしているけど、兄さんは俺の憧れだった。

いつしか、俺は兄さんのようになりたいと思っていた。

## 第一幕 ハジマリ

強い剣士になりたいと昔から思っていた。

「へえ、此処が琳さんが仕えているしろかあ。」

帝都の城を見上げ、金髪の少年、トーヤはそう口にした。

「トーヤ、そんなんじゃ、田舎者丸出しだぞ。」

呆れたようにトーヤを小突くは、トーヤの兄貴分であるコウハ。  
「いいじゃないの？」

ほのぼのと言うは、トーヤの恋人であるルナだ。

何故三人が此処に着たかというのと、話は数日前にさかのぼる。

トーヤはかつて大戦で活躍したという戦士、アークの実弟だ。

親のいない自分を此処まで育て、そして英雄とたたえられている  
兄はトーヤの憧れだった。

ある日、アークはトーヤに聞いた。

強くなりたいか、と

トーヤは大きく頷いた。

「俺、兄さん見たく強くなりたい。皆を守れる力がほしいんだ！」

あまりにも無邪気な答え。

その言葉にアークは苦笑した。

このごろは色々な町に強い魔物が出るようになっていた。

トーヤが強くなりたいと思ったいるのは、そんな魔物の脅威から  
家族や大切な人を守るようにだ。

「そうか。じゃあ、トーヤ。」

「ん？ 何??？」

「琳のことは知っているか？」

「うん！ 前玲さんと兄さんと一緒にあいに行ったことがあるし、  
その前にお仕事でこの村に来ていたよね??？」

琳とはアークの婚約者である玲の弟だ。

フィアンセ

年齢のこともあり大戦に参加はしていなかったが、15という異例の若さで帝都の最高戦士、ラメドにえらばれたという、天才的な実力者だ。

確か今年で22だと言っていた。

「で、琳さんがどうかしたの？」

「琳に書状を書いて送る。」

「は？」

「内容は、そうだな。トーヤの稽古をつけてやってくれ、といったところかな？」

「ほ、本当にいいの？ 俺、琳さんのところに修行に行つて……」

「ああ、こんな片田舎にいるより、帝都で剣を学んでいる方がいいだろうからな。」

「やった！」

だが、喜んだのもつかの間だった。

その日の夜。

「だめ！ 絶対だめよ！！」

黒髪に右目が藍、左目が赤紫といったオッドアイの女性が強い口調で言った。

兄であるトーヤとともに親代わりとなって自分を育ててくれた女性、玲が猛反対したのだ。

「帝都って言うと、上層部はそうでもないけど、一貧困街 スラムのほうは、すごく治安が悪いっていうし……」

「大丈夫だよ！」

トーヤは講義するが、玲は「黙ってなさい！」と一蹴した。

「帝都まで行く途中で魔物に襲われたりしたら、それこそ危ないじゃない！」

「いや、でも、もう書状、鳩につけて飛ばしちゃったし……。」「アークはばつが悪そうに言った。」

「キャンセルの書状書きなさい！……今すぐ！！」

「は、はい！！！」

哀れ悲しいかな。

この場に玲に逆らえる人間はいなかった。

## 第二幕 許可

「つて、ことがあったんだ。」

トーヤは先日のことを、ため息混じりに、幼馴染で兄のように育った青年コウハと、トーヤの恋人であるルナに話した。

「まあ、玲さんの気持ちは分からないでもないが……」

「コウハ？ どうして??」

「だって、あの人、今まで弟みたいに思っていたんだぜ、お前のこと。そりゃ心配になるつて。」

「でも……」

「そんなに行きたいか？」

「うん。」

「なんかいい方法ねえかな？」

二人がその良い方法を考えていると、「あ。」といままで黙っていたルナがつぶやいた。

「ねえ、私達三人もついて行くつていうのは？」

「「は?」」

ルナの提案に彼女以外の二人はぼかんとする。

「だから、トーヤが一人で行くつて言うから玲さんは心配しているんでしよう? だったら、私達も一緒に行くつていうのはどうかしら?」

ねえ、良い考えだと思わない?

そう言うルナにコウハはがしがしと頭をかきながら困った顔をする。

「つつつても、なあ……。オレ、一応この用心棒だぜ?」

「あら、大丈夫よ。コウハより強い人は何人もいるし、いまさらコウハ一人くらい抜けたつて大丈夫よ。」

にっこりと笑いながら、ルナはコウハに言った。

「……ルナ、お前何気に酷いな。」

「…………へ？ 何が??」

泣き舌交じりに言うコウ八にルナはきよとんとした顔で答え、ますますコウ八を落ち込ませた。

「あ、えーと、コウ八も琳さんに修行つけてもらおうといいよ。そうすれば用心棒の仕事ももっと上手くいくと思うし、何より女の子にもてるかもよ。」

「よし！ 行こう。」

トーヤの言葉にキツパリと答えたコウ八にトーヤは苦笑した。

(…………ははは、コウ八軽いなあ)

さっそく三人は玲の下へ交渉に行った

「はあ…………、今回はあたしの負けね。」

「…………て、コトは…………」

「もう自由にしなさい。これ以上止めても無駄だろうし。」

その言葉にトーヤはやったーと言んだ。

「ねえ、いつ出発する?」

「ちよつとまって、」

わくわくとした表情で言うトーヤを玲は制止した。

「実はキャンセルの書状もつ書いちゃって、飛ばしちゃったのよね。」

「ええ!..!」

トーヤはがくりとうなだれた

「すぐに、あれは取り消すって書状書いても、琳の機嫌損ねるだけだし…………少なくとも2、3週間はあけて書状を送らないと」

「そんなあ…………」

玲の言葉にトーヤははあゝ、と大きなため息をついた。



### 第三幕 黎い伝書鳩

トーヤは小さくため息を吐いていた。

翌日いつものように、三人で村周辺の魔物退治をしていたのだが、トーヤは元気が無かった。

「気にするなよ。ちょっと時間が延びただけだ。プラスで行こうぜ！何事もポジティブに！」

「……うん。」

コウハが鎌を素振りしながら元氣付けようとしているが、トーヤの声は何処と無く暗い。

「……あ、ねえ、トーヤ。琳さんってどんな人なの？」

どうにかトーヤを元氣にしようと、ルナは琳の話題をふった。

トーヤはうーん、と考えてから口を開いた。

「まあ、簡単に言えば、奇麗な人かな？ 男の人に言っても失礼だけど。」

その言葉にコウハも頷く

「俺が会ったのは、琳さんがトーヤつくくらいの歳の時きだったからな。本当に女みたいだった。」

「ふーん？」

どんな人だろうとルナは想像したがよく分からない。

「琳さんって、いくつなの？」

「確か、22って言っていたな。」

「ん？ 奇麗以外に何か特徴とかは？」

「玲さんと逆のオッドアイって言ってもちょっと違うけど……、右目がピンクっぽい赤紫あかむらさきで、左目が紫紺色しうこん。それで黒髪。……玲さんをおとなしくした感じ、かな？」

「へえ〜。」

トーヤとの会話でなんとなくルナはその琳という人のことが分かった気がした。

奇麗、奇麗といわれていてもよく分からなかったが、村でもかなり美人だといわれている玲とよく似ているといわれれば、なんとなく分かった気がする。

細身で中世的な男性のイメージがルナの中で生まれた。

「それで、ものすごく強いんだ！ おつきな魔物を一人で倒しちゃうくらい！」

「え！？」

ルナはトーヤの「ものすごく強い」の言葉に顔をしかめる。

強いという事はそれなりに筋肉も付いていることだろうと思い、細身のイメージが消えかけたが、それとは反対に魔術で闘う人もいるし、という考えが浮かび、琳の想像画は保たれたが、それも一瞬で崩れ去る。

「剣をつかって、一瞬で家ほどの魔物を倒しちゃうんだ！」

剣を使う？

ますます、琳の人物像が分からなくなる。

「ああ、そういうえば3年前だか、怪力と豪語されている盗賊団の頭を素手で倒したって聞いたことがあるぞ。」

次に言ったコウハの言葉に想像画が崩れ去る。

「（一体、どんな人なの……？）」

ルナの心の声を読み取ったように、トーヤは「会えばわかるって」と、自分が惚れた太陽のような笑顔で言った。

「そう、かな……。悪い人じゃないといいんだけど。」

「悪い人じゃないけど、気難しいかな？」

トーヤの言葉にこの先が少し不安だった。

はあ、と一つため息をついて空を仰ぐ。

不安になった時のルナの癖だ。

その時、彼女の視界に不思議なものが映った。

「え？何、あれ？？」

ルナの言葉に、トーヤとコウハも空を見上げる

空の空間が捻じ曲げられ、何も無い虚空に波紋のようなものが現

れる。

そこから黒い、鳩に似た感じの鳥が現れ、トーヤの家の方向へ飛んでいった。

「……ん、さ……だ、」

「え？」

トーヤの言葉が上手く聞きとれず、聞き返すがその前にトーヤは立ち上がり、走り出した

## 第四幕 旅立ち

ルナが声をかけるその前に、トーヤは走りだしていた。

彼を追ってトーヤの家につくと、黒い鳥は玲の肩にとまっていた。

鳥の足に縛り付けてあった手紙をみて、アークは苦笑した。

「琳から、俺たちとお前につて」

『先日、僕の元に手紙が届いた。』

すぐに、キャンセルの手紙が届いたが、どうせ姉さんが反対したんだろう？

少しは好きにさせてやら無いのか？

僕自身はかまわないが、トーヤは五月蠅いのではないか？

危険なのは分かるが、トーヤは恐らくその村で納まる器ではない。トーヤの希望があれば、こちらに来てもかまわない。

まあ、それでも危険だなんだかんだというのならばしかないが。

その時は手紙をこの人工精霊につけて飛ばしてくれ。

恐らく、許可しても保護者が付いてくるだろうから、部屋を余分に用意して待っている。』

まるで一部始終をみていたかのような文章にみんな苦笑した。

玲に関しては「どこかに隠れて、ずっとあたしたちのことを見ていたんじゃないでしょうね！？」と、手紙に当たっていた

「兄さん、琳さんもいって言うているみたいだし…」

「仕方ないな。明日のあさから出発するといいよ」

そう言ってくしゃりと弟の頭を撫でた。

「……にしても、わざわざ人工精霊つかってまで返事だすなんて…」

玲は肩に止まっている鳥をつつきながら呟く

「来るなら早く来いって意思表示じゃないか？」

「ありえるわね」

アークの言葉に玲は、弟の性格を思い出しながら答えた

「あ、あの……」

二人の会話に疑問をもったルナが聞く

「人工精霊って何ですか？」

ルナの疑問に「この仔のことよ」と、鳥を指差して、玲は説明した

「まあ、文字通り、人工的に作った精霊のことよ。式神ともいうわ。使い魔とか、そういった類のものだと考えてくれていいわ。」

「空間が歪んで、そこから出てきたのは？」

「この中には空間転移の術をかけてあるからね」

簡単な説明にお礼をいうと、この人工精霊を扱う術は琳の十八番であることも話してくれた。

「これを扱う術士は少ないってきいたが、実物を見れるとは……」

コウハはしげしげと、とりをみて呟いた。

何でも、一般的には物語の中の存在として知られているらしい。

現にルナやトーヤも『自らの手で生み出した妖精ようせいを操る魔法使いあやつ』の話あやつを幼きころから聞いていた。

「それより、玲さん！ 琳さんもこういつてくれていることだし、行ってもいいよね!？」

「玲、俺からも頼むよ。俺もコイツは外に出して色々なことを学ばせてやった方がいいと思うんだ。」

「……はあ、もうあんた達には負けたわ。」

兄弟の説得に玲は頷いた。

「ただし、危険なことにはしないようにね。兵士の人たちに迷惑をかけちゃだめよ。」

「わ、分かっているよ。」

かくして、彼等は帝都ていとへ行くこととなった。

だが、このときトーヤは知らなかった。

まさか、ただただ兄のようにしたっていた人物に修行してもらいに行くこのことが、自分の運命の歯車を動かすことになるとは……そして、十年前の大戦の秘密に触れることになるとは、気付くことはなかった。

いや、気付いていたとしてももはや手遅れだろう。

すべての運命は神様のレシピによって決定付けられていたのだから。

## 第五幕 前戯

トーヤ達は帝都へ着くと、城周辺の兵士にアーク直筆の紹介状を見せた。

先の大戦で活躍した戦士、アークからの紹介となれば、案外簡単にラメドのメンバーが集まっているという屋敷の場所を教えてもらえた。

屋敷に着き、呼び鈴を鳴らすと、肩につくつかつかないか位に黒髪を無造作に伸ばした青年が現れた。

「此処はラメド部隊長フィアル大将の屋敷だが、……何か用でもあるのか？」

ぶつきらぼうに言う青年に、トーヤは紹介状を渡した。

「……ああ、お前がセフィルのいていたやつか。」

納得したように頷く青年に対し、トーヤ以外の二人は首をかしげる。

「せふい、る？」

「誰だそりゃ？」

聞きなれない名前を口の中でつぶやくが、やはり自分の知り合いにこんな名前の人間はいない。

「琳さんのこと。昔色々あってこの名前を名乗っているんだって。」

「そう、か。」

「……そうなの？」

色々引っかかるところがあるようだが、二人は空気を呼んで、何も聞かなかった。

「それより、リ……セフィルさんはいますか？」

「セフィルなら今任務中だ。……ああ、そうだ。どうせなら君達も手伝ってはくれないか？」

「どうして俺達が？」

「お前達の実力を知りたい。……まあ、敵が現れるとは限らない任務だが。ちょっと部屋に来てくれないか？ 渡すものと、その服じゃああそこにはいけないだろうからな。」

「?????」

トーヤたちはよく分からないうちに屋敷へ通された。

部屋から出てきたトーヤとコウ八を見て青年は満足そうに頷いた。「うん、なかなか似合うな。」

トーヤは着慣れない服のすそを引っ張って顔をしかめた。

トーヤとコウ八は高級そうな生地とデザインのスーツに身を包んでいた。

まるでどこかのパーティーに行く貴族の様な姿だ。

「当たり前だ。 今回の任務先は城のパーティー会場だ。」

二人の心を読んだように青年は言った。

「今回の任務は城のパーティーの警備だ。 最近皇帝陛下の命を狙っている不届き者が多いからな。 お前達は参加者のふりをしてパーティーに忍び込み、有事の際に俺達の援護を頼みたい。 分かっただか？」

「はい！」

二人が同時に返事をする、隣の部屋からルナが出てきた。

「え……る、な??？」

薄桃色のドレスを身に纏ったルナにトーヤは一瞬見ほれた。

「……え、あつ、と……すごく奇麗、だね。」

上手く気のきいた言葉を言えないトーヤにルナはクスリと笑った。「トーヤ、別に無理に褒めなくていいわよ？ 私自身こういった格好が似合うなんて思っていないもの。」

トーヤがどもっている理由が、自分のドレス姿が似合わないと思っっているルナは苦笑した。

そんなルナの様子に、あわあわとトーヤは弁解する。

「そ、そうじゃなくって、ルナがきれい、すっごい美人で……え

「つとルナじゃないみたいって言うか、ルナはルナだけど、いつものルナよりいいって言うか、いや俺いつものルナも好きだけど、今のルナもいいって言うか……あゝ、もうっ、自分で名に言っているか判らなくなってきた！」

面白がって傍観しているコウハの前で、うわーと自分で混乱してわめいているトーヤを横目に青年はルナにトーヤが何故こんな反応をしているか、こっそりその理由を伝えた。

「まあ、」

頬を染めるルナを青年は微笑ましそうに見つめていた。

「なかなかお似合いのカップルだな。」

青年の言葉に二人はぼんっという音とともに湯気が出そうな程、顔を赤くした。

「な、何をいきなり言うんですか！」

「そ、そうです。からかわないでください。」

トーヤとルナの言葉に青年は首をかしげる。

「違うのか？」

「ち、違わないけど、俺とルナはそういう関係だけど！」

「ちよつとトーヤ！ へんなこと言わないでよ！」

あわてすぎて、言おうと思っていたことと違うことを口にするトーヤにルナは恥ずかしそうに顔を赤くして、彼を黙らせようとした。

「夫婦喧嘩は犬も食わないって言いますし、少し待ちましよう。」

コウハはあきれたように言うため息を吐く。

弟のように可愛がっていた少年が自分より先に彼女を作ったという事実が身にしみて辛いのだ。



## 第六幕 パーティ

馬車で城まで行く道中、レントと名乗った青年は、もう一度この任務の作戦を話した。

「……というのが、さっきも言ったがこの任務の大まかな作戦だ。セフィルは他のラメドメンバー二人と一緒に先に城に行っている。何か準備があるらしい……」

「準備？」

「ああ、何のことは話してくれなかったが。」

そうこう話していると馬車は目的地に着いた。

受付を通り、海上へ足を踏み入れる。

「さて、ついたぞ。敵が来ない限りは楽しんでいい。」

言つとレントは皇帝の近くへ行った。

彼は護衛だという。

対して三人は始めてきた城のパーティーに眼を丸くしていた。

「わあ、すっごーい！ きれいだなあ。料理もおいしそうだし

……、兄さん達にも見せてやりたいよ。」

「ばーか、アークさんはこの城に勤めていたんだぞ。こういったもの見慣れているんじゃないのか？」

はしゃぐトーヤを小突いてコウハは辺りを見回す。怪しい人間がいないかと思っただのだ。

とりあえず、そういった人間はいないようだが……。

「ん？」

コウハの視界に長い銀髪を首の後ろで結った青年が入った。

（確かあれは、ラメドの隊長、フィアール大將軍！？）

先の大戦でも活躍したという人物だ。

今の状況でなかったら、すぐに握手やサインを乞っていただろう。興奮を何とか抑えながら、コウハはトーヤを手招きした。

やはりトーヤもきらきらと眼を輝かせたが、すぐに一点に視線が

釘付けになっていた。

首を傾げて、見るとそこには、長い黒髪を背に流し薄桃色のドレスに身を包んだトーヤより少し年上に見える少女がフィアールにエスコートされていた。

トーヤはただ、じつと彼女を“みて”いた

「お、トーヤ！ あの子に見惚れたのか？」

ルナ「トーヤが女の子の子に見惚れてやがる！ とからかうと、ルナはむっとしてトーヤに怒った。

トーヤは弁解する傍らコウハに助けをもとめるが、コウハはにやにやと笑いながら成り行きを見守っているだけで、助けようなんてことはしない

意地悪く笑う彼の眼は『俺より先に女を作った報いだ』と語っていた

そんなことをしている間にパーティーは着々と進み、緩やかな音楽とともに、ダンスがはじまった

やはりというべきか、あの黒髪の少女とフィアール将軍がおどつていた。

フィアールに関しては、少女をエスコートしながら、純粹にパーティーを楽しんでいるようだが、少女はどこか不満そうな様子だ。

どこも問題はないようだ、トーヤがあくびをした時、どこからか悲鳴が上がった。

フィアールは即座に反応し、人ごみをかき分けて悲鳴の発生源へと向かった。

見ると王と王妃を連れていく屈強な男が見えた。

王への反乱か！

コウハはそれを見て、即座に彼らを追った。

「コウハ！ 危ないよ！！」

「危ないなんて言ってられっか！ 名をあげるチャンスだぞ！」  
そう言つてコウハは人ごみを逆走した。

王を連れた反逆者は隠し通路へと消える。

フィアールは会場にいる他の反逆者と闘っていた。  
足止めをされているのか。

トーヤは一瞬どうしようかと迷い、コウハを追った。

隠し通路に入ったコウハはいくつもの兵士の制服を着た人々が倒れているのを見た。

「酷え……」

呟き、これを行った犯人は誰かと前方を見ると一人の少女が目に入った。

「!!!」

それはフィアールにエスコートされていた、あの少女だった。

## 第七幕 謎の少女

少女は1人の倒れている兵士の手を踏みつけていた  
ぼきぼきと骨の碎ける音がする。

「質問に答える。」

少女はキツイ言葉で兵士に問うた  
だが、兵士は頑かたくなに口を噤しむんだ。

少女は兵士の手を力強く踏みつけた。

ボキボキと骨の折れる音がする。

「早く言わないとお前の手は使い物にならなくなるぞ。」

少女はフツと悪魔のような笑みで言った。

コウハは激情シツキョウのまま、片手鎌シラヤを振りかざしていた。

真つ暗な通路の所々にあるろうそくの明かりが無ければ簡単に迷  
っているだろうな、とどこか他人事タニジのように思いながら、トーヤは  
薄暗い隠し通路を走っていた。

コウハとルナはどこへ行っただろうと考えながら走っていると  
前方に見慣れた少女の姿が……

「ルナ！」

「トーヤ？」

思わずトーヤはルナを抱きしめた。

「無事で良かった！」

「ト、トーヤ。それよりコウハが……」

ルナは視線だけで通路の奥を示した。

「先に行っちゃって、はぐれたの。見たところここは一本道だし、  
このままえいけば会えると思ったんだけど……」

そこでルナは口をつぐんだ

ひとりで心細かったのだろう。

それに気づいたのか気付かなかったのか、トーヤはルナに無邪気

な笑顔で元気づけるように言った。

「大丈夫だよルナ。今はおれが付いているから。とっととコウハ探しちゃおう」

その言葉にルナは大きくうなづいた。

風を切る音と共に空を切る感触。

コウハの振りかざした鎌は少女には当たらなかった。

彼女が瞬時に間合いを取ったからだ。

「新手か。」

少女はつぶやくともう一步間合いを取ると、ドレスのすそをめくり、太ももに取り付けてあるホルダーから、ナイフを取り出し、コウハに投げた。

その間わずか2秒。

その驚異的なはやすさに、コウハはそれをよけることができなかつた。

……が、

トスツ

ナイフが当たった場所はコウハのカマの柄の部分。

助かったと思った瞬間、コウハは青ざめた。

“外した” んじゃあない。わざと“当てた” んだ。

そう。

少女は自らの力を見せつけるため、わざとコウハではなく、彼の鎌の柄に当てた。

力に差があることをみせ、こちらの戦意をそごうとしているのか

……

わざわざ、的が細くて当てにくい場所を狙って。

そう考えている間に、第二撃が飛んできた。

今度はコウハの髪をかすって。

ぱらぱらと数ミリ程度の髪の毛が床に落ち、コウハの頬を赤い液体が濡らす。

ナイフは彼の頬をカスつてはいなかったのに……  
血が、地面に落ちた時、剣圧だけで切られたと悟った。  
雫が落ちる音が脳裏にいやに大きく響いた気がした。

> i330302 — 3889 <

## 第八幕 少女の正体

トーヤとルナは、相変わらずコウ八を探しながら、隠し通路を歩いていた。

「結構歩くけど、コウ八いないねえ。」

もう少しで外に着くんじゃない？と言うトーヤに対しルナは少し不安そうだ。

「コウ八、大丈夫かしら？」

不安気にささやき、トーヤの手をぎゅっと握るルナにトーヤはルナを安心させるように優しく言った。

「大丈夫だよ。コウ八はアレで強いしき。きっと大丈夫だよ！」

「うん。」

元気付けようにもまだ少しルナの顔には不安の色が濃かった。

早くコウ八を見つけようと前方に目を向けると見慣れた後姿

「……あ、あれ！」

コウ八は一人の少女と対峙していた。

パーティ会場で見たあの少女だ。

「あの女！」

トーヤは少女に向かって走った。

「琳さん！」

トーヤはそういつて少女に抱きついた。

少女との力の差を見せられ、コウ八は動けずにいた。

どろりと赤い血が頬をぬらす。

少女はじつとこちらを見て動かない。

だが、少しでも動いたら今にもものを噛み切るであろうことは、彼女の気配でわかった。

静かに、ただじつと立っているだけに思えるが、その手にはいつでも攻撃できるようナイフが握られ、彼女のまとう雰囲気は、まる

で獲物を逃がさない猛禽類のそれに近かった。

さしずめ少女が驚なら、コウハは捕食される子鼠といったところか。

ぴりりと張り詰めた緊張感。まるで薄暗く肌寒い地下道が、ジャングルの熱帯雨林に変わったような気がした。

やらなければやられる。だが、しかし……コウハは動けなかった。

どうすべきか。

そう考えたそのとき！

「琳さん！」

どこからとも無く現れたトーヤが少女に抱きついた。

「ええ!!!??」

コウハはじつと少女を見た。

どうみたって、女にしか見えない。

確か琳はれつきとした男の気がしたのだが……。

そう考えているコウハをよそにトーヤは少女

いや、琳に質

問責めをしていた。

曰く、

「何で女の子の格好しているの？」

「ココに倒れている兵士は何なの？」

など、今の状況に関することから

「最近どう？」

「元気」

「ねえいつから修行してくれるの？」

など、今の状況にあまり関係ない質問までごちゃ混ぜだ。

いい加減、頭が痛くなったと、琳はトーヤを引き剥がし、一つずつ質問しろ、と言った。

「とりあえず、何で女の子の格好しているの？」

その言葉に琳はあまり答えたくなさそうに視線を彷徨わせてから

重々しく口を開いた。

「敵を欺く為の作戦らしい。」

何でも、同じラメドメンバーの人間に無理矢理女装させられたらしい。

チームで最年少ということもあって上司には逆らいづらいとか……  
そう話した琳の顔は羞恥にか、赤く染まっていた

「じゃあ、この兵士は……」

コウハの言葉にああ、と琳はつぶやいてから答えた。

「敵方のスパイだ。どこからか制服を調達してきて、紛れ込んでいたらしい。」

「な、何だ……。」

コウハは、一気に体の力が抜けた気がした。

今更だが、自分は勘違いをしていたというのか。

「それにしても最初、本当に驚いたな。前にあったときはまだこれくらいの背丈だった子どもがココまで大きくなって、自分の前に現れたんだから。」

にやにやという言葉が良く似合う、意地の悪い笑みを浮かべながら、琳は胸の前に手を持っていき、ひらひらと揺らして見せた。

「え？ つまり、貴方は最初っから、俺の正体を……。」

「知っていたし、分かったさ。」

けるりと琳は答えた。

「ココの修行は生半可なものじゃあ、ない。付いてくれるかどうか、テストしていたんだ。」

「……結果は？」

恐る恐る聞いたコウハにしかし、琳は……

「さあな、」

とはぐらかした。

「ああ、それとこの町にいる間、僕のことにはセフィルと呼べ。」

「え？なんで？」

「どうしてだ？」

ルナとコウハが首をかしげる。

「此処で僕はある事情があつて、セフィル「アスター」という名前を名乗っている。わかつたな。」

有無を言わせない視線に三人は同時に頷いた

それから、敵方の大将かしらを捕縛したファイアールと合流し、一同は解散となつた。

とても疲れた一日だったのだろう。

3人は馬車の中ですぐに眠ってしまった

## 第九幕 ラメド

「おい！お前らさつさと起きろ！」

琳 セフィルの声で起こされたコウハは始めてみた彼の軍服姿に、小さく目を見開く。

「……長い髪の毛はヅラじゃないのか？」

その言葉にセフィルは顔をしかめた。

そう。セフィルはやや青みがかった、長い黒髪を高い位置で一纏ひとまとめにして、青いリボンで結んでいた。

「悪かったな。」

「……切れば、女の子に間違えられる可能性は低くなるのに。」

トーヤの言葉にキツとセフィルは彼をにらみつけた。

「願がをかけているんだ！ 放っておけ！！」

セフィルに案内され、三人は広間へ向かった。

するとそこには……

「ようこそ、帝都へ。」

笑顔で手を差し出し、握手をしようとするフィアール。

うしろにはラメドメンバー全員がそろっていた。

「フィアやセフィルから、ある程度の事は聞いた。とりあえず、

自己紹介を使用じゃないか。」

そういったのは昨日会った黒髪の青年レント。

「昨日も言ったが、レント＝サイラン。一応29だ。」

彼の年齢に三人は驚いた。二十歳くらいだと思っていたからだ。

そんな彼らには眼もくれず、レントは他のメンバーに目配せした。

「じゃあ、まずはワシから……ワシはラメドの古参、ジーモン＝ベ

ツカートだ。今年で66じゃが、まだ若い者モウシには負けんぞ。」

そう言ったのは威厳のありそうな初老の男。威しい外見とは裏腹

に話しやすそうな人物のようだ。

「私はサラ＝フロンよ。27歳よろしくね。」

笑顔で手を差出してきたのは、この中で唯一の女性だ。

薄桃色の髪を綺麗に結い上げた彼女に、コウハは一目散に反応した。

「よろしく願います！ コウハって言います。良かつたらこの後お茶でも……って、ぐわ！」

バキツと彼の頭を撲つたのはセフィルだ。

「サラ將軍に手を出すな……一応旦那持ちだぞ」

後半は小声でセフィルは言った。

「うつそくん。」

コウハはその言葉を聞くとうなだれた。

「えっと、ぼくはフォンル＝リクロード。25だよ。周りからはフォンって呼ばれている。」

そう言って優しく笑むは、淡い栗色の髪の青年。

その物腰の柔らかさに、三人はとても好感を持てた。

「オレはクルト＝ファヴァレット。28ね。」

なかなかの美形な金髪の男がさういうと、彼　クルトはルナの手をとった。

「なかなか美しいお嬢さんだ。後十年後が楽しみ……」

だな、と続くはずだった言葉はそこで途切れた。

「フィ、フィアールさん……どうしてオレの首筋に剣をつきたてているのかナア？」

「何でって？ それは不純分子を排除するためだよ。クルト將軍？」

ニコニコと、背負っていた薄青色の大剣をクルトの首筋に突きつけながら、フィアールは言った。

「ふ、不純分子??」

「未成年を口説くなんて、半道徳的だろう？」

やはり顔はニコニコとした笑顔で、さらに剣をつきたてた。

「ひ、ヒイ！ オイ！！セフィール、コイツお前の師匠だろ。何とかしろ。」

「師の不始末は弟子の片付けるものですが……。生憎、僕はこれを不始末と取れないので。」

「サツとセフィールはクルトから視線をそらす。」

「フォン！お前は……！？お前コイツの弟だろ！この物騒な兄をどうにかしろお！」

「え？ 何？何なの？？ なんだか急にクルトの声が聞こえなくなっちゃった。」

「う、裏切り者……！！」

「さあ、腐った根性を叩きなおしてやる！ 表へでろお……！！」  
そう言つて二人は外へ出て行つた。

「あの銀髪の男がフィアール＝リクロード。 フォンルの兄でラメドのリーダーじゃ。 一応。」

呆れたようにジーモンは言つた。

大きくはあくと、ラメドのメンバー5人はため息をはいた。

「……改めて、僕はセフィール＝アスターだ。 ようこそ帝都へ。 特訓は楽じゃないぞ？」

ついてこれるか？

眼で3人を促す。

トーヤは大きく頷いた。

「はい！ 辛い修行にも、オレ……ついていきます！」  
大きく頭を下げる。

「おねがいます。」

彼のその様子にラメドメンバーは笑みを深くした



## 第十幕 修行始まり！

「今日から修行だ。」

そう言うレントはどこか意地の悪い笑みを浮かべていた。

朝食を済ませると、三人はレント、フィアール、セフィルにラメドの修行場へ案内された。

修行場、とは言ってもそこは人の通らない町はずれの森。

一般人は入れないようにされており、モンスターがうじゃうじゃいる。

森の入口まで来るとレントが口を開いた。

「今日の修行だが、セフィルとお前たち三人で勝負をしよう。」

「……え！？」「」

三人は顔を見合わせた。

「と、言っても、剣を持ってぶつかり合うわけではない。」

言い終わるとレントは長く真っ白な包帯を懐から取り出した。

「セフィル、これで髪をしばれ。」

「は？」

セフィルはきょとんと眼を丸くしてレントを見た。

「そのリボンをはずして、……ああ、お前は髪が崩れにくいように、リボンを結ぶ前、細い髪留めの紐で結んでいるだろう？」

「はい」

「じゃあ、大丈夫か。包帯を少し緩めに結んで……これでいい。」

リボンをとり、包帯を結んだ髪をセフィルはなれないように触っていた。

正直長すぎる包帯が腰までできていて鬱陶しい。

そんなセフィルの様子に苦笑しながらフィアールは3人にいう。

「ルールは簡単。3時の鐘が鳴るまでに、セフィルの頭に付けた包帯これを奪えれば、トーヤたちの勝ち。奪えなければセフィルの勝ち

だ。セフィルはハンデとして愛用の剣は没収。 ナイフも切れな  
いものを……」

「魔法は？」

セフィルはフィアールに問う

「中級まで許可。」

「はい。」

「トーヤ君たちは自由に戦ってくれ。 昼飯はこのリュックに……  
傷薬も入っているぞ。」

トーヤ達は3人分入った大きめのリュック。 セフィルは一人分  
の小さめのリュックを持たされた。

「……フィアール様、重いのですが。」

「2キロの重り付きハンデだ。」

その言葉にセフィルは小さくため息をついて、じぶしぶしよった。  
「では、始め」

レントの高らかな掛け声にセフィルはサツと森の中に入った。

トーヤが率先して彼を追い、あとの二人も（コウハは荷物を持ち  
ながら）続いた

## 第十一幕 VSセフィル

木々の間をぬって、道無き獣道を走り、時にモンスターをかわしながら、トーヤはセフィルを追った。

「セフィルさん！ 覚悟！！」

ようやく追いつき手を伸ばすがそれは指先をかすっただけで、掴むことはかなわなかった。

「甘い！！」

ナイフが投げられたが、うまくそれをかわすとトーヤは剣を構える。

「本気で行くよ……」

「ならば、僕は手加減しようか？」

それは戦士への侮辱だ。

だが、ここで逆上してはセフィルの思いつば。トーヤは深呼吸し、落ち着きを取り戻した。

「は！」

剣に風の魔法をまとわせ、一気に振り上げる。

すると、剣圧けんあつによって風魔法が真空波しんくうはとなって、セフィルを襲う。

「闇よ 我が障害を消し去れ」

小さく紡がれた言葉に、真空波は 闇にのまれて消えた。

「あ！セフィルさん汚い！」

トーヤは不満を口にするがセフィルは涼しい顔だ。

「中級魔術なら、許可は出ている。 闇の蛇 我敵わがを拘束しろ！」

「わあ！」

地面から現れた紐状の陰にトーヤの体は拘束された。

「ぐぬぬ」

腕を動かすもびくともしない。

「時間がたてば外れるようになっていいる。 それまではそこでおとなしくしていようよ。」

ひらりと軽快に、セフィルは走って森の奥へと消えていった。  
魔術で拘束されら体を見る。

「簡単に外れそうにはないなあ。」  
「ためしにひっばってみるが、結果は同じ。  
外れることはなかった。」

諦め掛けたその時

「おい、トーヤー!!!」

どこか遠くでコウハの声が聞こえる。

「コウハ！ルナ！ こっちこっち!!!」

トーヤの声を聞きつけ間もなく二人は彼のもとにたどりついた。  
その瞬間、コウハはトーヤの様子を見て顔をしかめる。

「トーヤ、どうしたんだ？それ……」

「魔術で拘束されているみたいだけど？」

「どうしたも何も、セフィルさんにやられたんだ。 ルナ、これ外  
せる？」

「やってみるわ。」

ルナは杖を振りかざし、魔法陣を出現させた。  
ぱああああと柔らかい光に溶けて拘束は消えた。

「うん、動ける！ルナありがとう！」

「セフィルさんに一発かまされちゃったのね。」

ルナは呆れたように溜息を吐いた。

「だって、まさかこんな魔法があるなんて思わなかったもん。」

「だからって……」

ルナが言いかけた瞬間、四方八方からナイフが飛んできた。

「きゃあー！」

「ルナ！」

ナイフがルナに向かったが、トーヤが咄嗟に彼女の腕を引き、地面に伏せたため、ナイフは当たらなかつた。

コウハは大丈夫かと、横目で彼を確認する。ナイフはどこから飛んでくるかわからないが、速度はそう速くない おそらく魔法

で飛ばしているのだろう

為、コウハも無事のようにだ。

「コウハ、大丈夫？」

「ああ、平気だ」

トーヤはルナをかばい、剣でナイフを払い落としながらコウハのもとへ向かった。

「ルナ！」

「うん、わかった」

トーヤがルナに合図を送ると、トーヤとコウハはルナを守るように立ち、ナイフを落とす。

その間にルナは防御魔法の陣を完成させていた。

「はあ！」

ルナの魔術に反応し、トーヤたちの周りを透明な壁が囲う。

「防御魔法か。いつまで持つかな？」

少しはなれたところで魔法を駆使し、ナイフを操っていたセフィ  
ルは不適に笑った

## 断章 セフィルの過去 (前書き)

この話は、トーヤたちの出番はありません  
フィアと連との会話が主です

番外編的な話なので、ここは飛ばしても読めるようになっていきます。

## 断章 セフィルの過去

その頃、レントとファイアは……

「ナイフを大量に投げるなんて、とんでもないことをしでかすな、お前の弟子は……」

隠れて様子をつかがっていたレントは、彼と同じく様子を見ていたファイアの方を見た。

対してファイアは、眉間に皺を寄せてため息をついていた。

「まったく素人相手に本気になるなんて……」

「そうやって育てたのはお前だろ。」

はあ、とため息をつくファイアにレントは冷静に突っ込みを入れる。ファイアは十年ほど前、幼いセフィルをひろい、それ以来彼の父親代わりとなつて、彼を育てていた。

その時、ファイアは彼が一人で生きていけるように最低限の教育と武術を教え込んだ。

元々、素質があつたのだろう。幼いセフィルは勉学も武術も人一倍出来た。

その後、ある程度の武術・魔術を習得したセフィルに教えたこと、それは……

敵である限り、相手が誰であろうと結して手加減をするな。だつた。

「まさかこんな方向に作用するとは思わなかつたんだ」

ファイアはあのと看の事を思い出しながら、過去の自分を呪つた。あの時はセフィルはある難問に突き当たつていた。

それは答え次第でその時から考えて未来　つまり“今”

のセフィルの生き方を大きく変えるものだつた。　その時の

ことについては、後々この物語で語ることになるだろうから、今回いくらか割愛かっあいさせてもらつた。

そう、あの日セフィルは自分の“今”と決別するか“過去”と決別するか悩んでいた。“今”と“過去”。どちらかを選べばどちらかを棄てねばならない、そんな選択を幼いセフィルは迫られていた。どちらを選ぶか。このままでは両方とも棄てねばならぬ状況にまで陥っていた。彼に残された時間は少なかった。

そんな時セフィルに教えたのがあの言葉だった。

敵である限り、相手が誰であろうと結して手加減をするな。その言葉を聞いたセフィルは目を見開いた。そう。

その言葉は幼いセフィルには些か残酷な言葉でもあった。

だが、セフィルは自らの心で決心した。

『僕は、今を選ぶ』

『過去と決別する覚悟は出来た』

そう言つてセフィルは“今”を生きる道を選んだのだ。

その時の彼の眼は、とてもまっすぐなものだった。

「あの時、彼は何をおもつたのだろうか？ 私を残酷な師だとおもわなかったのか？」

当時を振り返り、フィアはやや沈んだ声でつぶやく。

「さアね。少なくとも俺だったら、その場でお前を撲るなくかもしれない。“敵であつても大切なヒトと闘えるか”ってな。」

齒に衣着せぬレントの物言いにフィアは小さくつぶやいた。

「そうか。」

「……セフィルはつよい子だよ。心も力も……」

「ああ、分かっている。」

幼い身体と心で必死に運命に立ち向かい、戦った。

誰にも頼ることの出来ぬ難問にもセフィルは一人で立ち向かった。それがたとえ、残酷な結末だったとしても。

それでも彼は、“今”を選び、生きていた。

その先の未来へ進むために。

「ああ、セフィルは私の自慢の……」

「ファイアが言いかけたとき……」

「どーーーーーん」

「遠くでなにやら大きな音が響いた。」

「な、なんだ！？これは！！」

「ぐらぐらと地面が揺れる。」

「それとともに今や扱うものの少ない特殊な魔力の霸道を感じる。」

「レント！ 恐らくこれはセフィルの言霊コトダマの力だ。」

「セフィル、素人相手に上級の術を使ったのか！？」

「いや、術自体は中級……だが、威力と魔力は最上級並だ！」

「何だつて！？」

「一体何が起こったのか？」

「二人は状況を確認しようと、セフィルとトーヤ達の元へ向かった。」

第十二幕 暴発（前書き）

……そろそろ、サブタイトル考えるのがきつくなってきました（汗）  
ネタがない……

## 第十二幕 暴発

ナイフの襲撃が止んだと同時に、ルナの防御魔法も限界を超え、消えた。

「ふう〜やっと終わったか」

やれやれとコウハが気を抜くと、トーヤが首を横に振った。

「セフィルさんがこれくらいで終わらせるはず無いよ。何か仕掛けがあるはず。」

「仕掛けて……」

あるわけないだろう

そう続くはずだった言葉はそこで途切れた。

コウハが動いた瞬間、何かが彼の肌に触れたのだ。

「糸？」

「ちがう、ワイヤーかな？」

ルナが周りを見渡すと、日の光に反射して、うっすらと大量に張り巡らされたワイヤーが見えた。

そこではたと気付く。

「さっきのナイフは、このワイヤーを張り巡らせるための……」

「ご名答だ。」

「……！」

突如頭上から声が聞こえ三人は上を見る。

するとそこにはワイヤーの一本の上に立つセフィルの姿が見えた。

「これでお前達は逃げられない。僕の勝ちだ。」

「セフィル！ 汚いぞ！」

コウハが抗議するがセフィルは何処吹く風とばかりに聞き流す。

「これで止めだ。……暗雲たち込めし 闇の我が身の力となりて  
その闇の雲の力を我に示せ。」

特殊な呼吸法と言葉によってつむがれる言葉。コトダマ

止める間もなく、最後の単語がつむがれるとおもった瞬間。

「う、くあ……！！ 何故？ カがコントロールでき……逃げろ！」  
瞬時にセフィルは左手で魔術の印を結び、風の魔法真空派でワイヤーを切った。

「え！？」

自分達を囲んでいたワイヤーが無くなり安堵したのもつかの間。  
なぜかセフィルが苦しんでいる。

「セフィルさん？」

トーヤは額に脂汗をかき、苦虫を噛み潰したように顔をゆがめる  
セフィルを見た

「お前達、早く逃げろ！」

どうやら、間もなく発動しそうな力を抑えているらしい。  
状況を察知した三人はあわててセフィルから距離をとる。

(間に合わない！)

危険を察知し、セフィルは防御魔法の印を結び、それで、トーヤ  
達を守る

ある程度、距離があき、セフィルが安心した瞬間

ドーン

魔法が爆発した

その日の夜

「セフィルさんは！？」

医務室からでてきた医者にとーヤが詰め寄った

「安心なさい。命に別状はなかった。3日安静にしていればすぐに  
なおるよ」

そのことを知るとトーヤの身体から一気に疲れがぬけた

「良かったよ」

「一応、あんな外見だが、ラメドの一員だ」

トーヤを慰め、そういつた瞬間  
ガッ

フィアの頭上にタライがおちてきた

「……これはセフィルの空間転送術だな。あいつは殊更に自分の容  
姿を気にしているからな。怒らせたんだろう。」

レントはあきれたように呟く。

「この調子なら大丈夫だろう」

レントはそう続けると、先に帰った

「トーヤも、もう戻るといい」

「……はい」

断章 “父”と“息子” (前書き)

トーヤ出てきません

この話は飛ばしても、大丈夫です

## 断章 “父” と “息子”

トーヤが帰る背を見送った後、ファイアは一人医務室に入った。

「セフィ、大事ないか？」

ファイアの言葉にセフィルは無言でうなずいた。

「はい。おかげさまで」

「お前が、自分の魔力の制御ができなくなるなんて……なにかあったのか？」

「いえ、……でも、心当たりはあります。」

「心当たり、とは？」

ファイアは顔をしかめる

だが、セフィルはかまわず、ファイアに問う

「トーヤをどう思いましたか？」

「どうって、まっすぐな子だな。素直に好感が持てた」

「そうですか、やっぱり……」

つぶやき、セフィルは考え込むようにうつむいた。

「おいおい、セフィ、いったい何なんだ？ 私にもわかるように話してほしいのだが。」

「ファイアさん、トーヤは火の民ですよ。」

「それはわかってる。あのアークの弟なのだから。」

「……では、何故“好感が持てた”のです？」

「……！」

ファイアははつとした。

セフィルは続ける。

アイスウィッチ

「ファイアさんは氷の魔女の末裔。その性質から、火を操る魔獣

フェニックスと相性の良い火の民とは相性が悪い。初対面の時

から、お互いあまりいい印象を持っていなかったでしょう？ 大戦中でも貴方方は毎日のように衝突していた。」

「だが、例外があってもいいのではないか？」

「……ですが、僕の力の暴走のことを踏まえると、トーヤには火の民の……炎の力と共に、何か別の力があると考えることが妥当です。」

「そう、か。」

「明日、調べてみます。」

「無理はするなよ」

クシャリとフィアはセフィルの頭をなでる。

「子供扱いしないでください。」

「幼いお前を拾ってここまで育てた私からすれば、お前はまだまだ子供だよ」

そう笑んで部屋を後にするフィア父親の背を、じっとセフィルは見つめていた。

## 第一三章 Light (前書き)

もう本当にタイトル考えるのが大変です。

実はタイトル、サブタイトルが決まらないために、投稿できない小説が(ピーー)作……(汗)

### 第一三章 Light

部屋に戻ったトーヤはどこか落ち着かないように、部屋中をうろろしていた。

「セフィルさん大丈夫かな？」

「きつと大丈夫よ、お医者様も言っていたでしょう？」

はあとため息を吐くトーヤをなだめるようにルナは言う

「セフィルさんならきつと大丈夫よ。」

「でも……」

「……セフィルさんがあなつたのはあなたのせいじゃないわ」

ルナの言葉にトーヤはまじまじと彼女の顔を見る

「ルナ、気づいていたの！」

「ええ。女の勘を甘く見ないで頂戴！」

ふふ、と得意そうに笑うルナにトーヤはばつの悪そうに頭を叩いた。

「かなわないなあ。」

「あら、いつものことじゃない？」

幸せそうに笑う二人にコウハは溜息一つ。

「俺がいるって忘れていないか？」

翌日

驚異的な回復力で、すっかり体調を戻したセフィルは、トーヤを屋敷の中庭によんだ

「セフィルさん、何をするの？」

「お前の潜在能力を調べる実験だ」

「じ、じっけん！」

セフィルの言葉にトーヤはまじまじと足元にかかれた禍々しい霧

困気の魔方阵を見た。

「……………」

「安心しろ。痛くはない……………多分」

「多分って何!?!」

「失敗しなければ、という仮定の話だ」

「失敗したら?」

トーヤは恐る恐るセフィルに聞いた

「さあ?」

「さあ? って、なんだよ!」

どンドン不安になっていくトーヤにセフィルは一言

「失敗したことがないからな」

さらりと言ったセフィルの言葉に少なからずトーヤは安心した。

「とりあえず、魔方阵の中心に立て。」

「うん。」

指定されたとおり、トーヤは魔方阵の中心にたつた

それを確認すると、セフィルは懐から白い石を取り出した。

「白き闇の聖霊よ 我と血の契約の下 我が前に現れよ」

感情無く、小さくつぶやかれた言葉に反応するように、石が発光した。

「うわっ!」

トーヤが光から目をかばうと、光は徐々に人の形お形成していき、最終的に一人の青年の姿となった!

「どーも、初めまして…………て、おや? どこかで会ったことあるよ  
うな?」

まじまじとこちらの顔を覗き込む青年にトーヤは若干引き気味だ  
った

「は、は?」

「どこであつたんでしようね?」

うーん、と考えた青年はやがてあつと声を上げた

「そっだ!アークだ。君、アークに似ているんだ!」

「……アークはおれの兄だけど。」

「え？ アークの弟はまだ幼いつて聞いたけど？」

首を傾げる青年にセフィルはため息交じりに言った

「……今が、何歴何年か言えるか？」

「52歴37年？」

「今は今は45年だ。」

呆れたように青年に向かってセフィルは訂正を入れた。

「年号もまともにも言えないほど時間感覚がくるっていたか。」

「だってだってえ、主は最近僕のこと石に入れたままで殆ど外に出してくれなかったじゃないですか！」

「……一日一回は、世間話位ならしていただろう。」

「でもおゝ」

そう言っておいおいと泣き出す青年の後頭部をセフィルは遠慮なしに叩いた

「いたっ！」

「泣くな。外に出さなかったのは謝るから、まず仕事を頼まれてくれ。」

「仕事？」

「この魔方陣にお前の魔力を注いで、解放してくれ。」

「……それでなんで僕を？」

「魔力が足りないから手伝え。」

「はい」

青年は返事をするに地に膝をつき魔力を解放した。

「この身に流れる闇の力よ……」

小さくつぶやく言葉と共に、黒い闇の力がトーヤを囲む。

「うわ！」

その時、トーヤの体から淡い光が流れ出した。

「なに、これ……」

トーヤは茫然とつぶやく

「やはりな。」

一人、セフィルだけが納得した様子でいた。

「やはり、つて？」

「お前の体には闇の力と対になる光の力が流れていた。」

「光の力・・・」

まじまじと、トーヤは見慣れた自分の掌を見た。

「基本的にこの世に存在するものの多くは、自然界の力、主に火、水、風、地の力を扱う。」

「えーと、兄さんが火で、玲さんが水、だよな？」

「そうだ。だが、たまにそれとは違うもの、光と闇の力を扱うことのできる者がいる。」

「……」

「おまえと、僕だ」

「ええ！？」

「この二つの力は特殊でな、たがいにその力を引き出しあうものだ。僕の魔力が暴発したのは微量にお前の体から漏れ出た光の力を浴び続けていた結果だ」

「えっと、ごめんなさい」

トーヤは申し訳なさそうにあやまる。

「べつにいいさ。それに気付かなかった僕の不注意でもあるから」

「でも」

「それより」

「？」

「その力、伸ばしてみる気にはならないか？」



第三章

List

(後書)

## 第一四幕 光の祠

「その力、伸ばしてみる気にはならないか？」  
セフィルの言葉にトーヤは首をかしげた。

一体何故こうなったのか。

トーヤとセフィルは、うす暗い森の中を歩いていった。

「セフィルさん、一体どこに行くの？」

「すぐにわかる。」

きつぱりと言ったセフィルはどうやら答える気はないらしい。

とりあえず彼についていけばどうにかなるだろうと、トーヤは黙ってセフィルの背を追った。

ついた場所は薄暗い森のおくの、なにやらおどろおどろしい雰囲気を放つ祠。

「ここだ。」

セフィルの言葉にトーヤは改めて祠を見る。

「なんか怪しい祠だね。」

「事実怪しい祠だ。」

「え、ええー！ そ、そんなところいくの？」

「……なら、何故僕たちはここまで来たんだ？」

「……俺の力を伸ばす。だっけ？」

トーヤの言葉にセフィルは頷いた。

「そうだ」

「……で、何でこんな怪しい祠に？」

「それは……」

セフィルが理由を言おうとしたそのとき。

『ちよつと！ 怪しいなんて失礼ね！』

どこからか若い女の声が聞こえた。

「……………でた。」

セフィルが顔をしかめる。

『あら、あなたはセフィルじゃない!』

久しぶり!とどこか上機嫌な声とともに、一人の女性が姿を現した。

長い金色の髪に、ところどころ金の装飾の施された真っ白なドレス。シンプルなドレスだが、そのシンプルさが彼女の美しさを引き立てていた。

『元気? “フルム”はどう? げんきしてた??』

「相変わらずだよ。それより、こいつに適正があるか調べてみてはくれないだろうか?」

『ああ、もう一人いたわね。顔をよく見せて』

女性はトーヤの近くに寄ってきてやがて、目を丸くした。

『アークがちつさくなくなった…………?』

「馬鹿をいうな!」

女性のつぶやきに、間髪要れずにセフィルが突っ込む。

「えっと、アークは俺の兄だけど…………」

『へえ、あんたあいつの弟なの? 道理で』

女性はやつと合点がいったというように微笑み、本当に似ているわねとトーヤの顔をぶしつけに見つめていた。

ときおり、少し子供っぽいか、よくみたら弟君のほづが、とかつぶやいている。

どうやら、脳内でトーヤとアークの間違い探しを繰り返しているらしい

すっかり当初の目的を忘れている女性を見てセフィルは深くため息をついた。

「アークと比べてみるのはかまわないが、その前にそいつに適正があるのか調べてほしいんだが?」

『ああ、ごめんなさい。忘れていたわ』

女性は改めてトーヤに向き直ると自己紹介をした。

『私はミハル。ここの祠を守る精霊よ。』

「精霊!?!」

今度はトーヤが女性をまじまじと見る番だった。

『あら? 私の美しさに見とれた?』

「あ、いや、精霊っていつても人とまったく変わらないなと思って」

『……そこはうそでも、はいつて答えることよろよ』

おだてる、ということをしなないトーヤにミハルは不満げに口をとがらした。

『まあ、子供だし仕方ないか。 今日だけは特別に、許して……ア・

ゲ・ル』

語尾にハートマークをつけて、ミハルはトーヤにいったが……

「……ああ、はい?どうも??」

色気は通じなかった。

## 第十五幕 祠の中

ミハルに祠の奥へ案内されたトーヤは、祠のおくのホールのようなところへたどり着いた。

「ここは？」

トーヤは広く開けた場所を不思議そうに眺めていた。

「闘技場、といったところか」

声がして振り向くとそこにはセフィルがいた。

だが、不思議なことにかねは、ホールに入らず、入り口近くの通路の壁に寄りかかっていた

「セフィルさん……闘技場って？」

「文字通り、戦う場所」

「たたかう？」

トーヤは首をかしげる。

「いったい何と戦うというのだろう。」

その疑問を打ち消すように、ミハルが口を開く

「わたしと、よ」

「ええ!？」

なぜ、自分が精霊と戦わなければならないのか

『それは、あなたが私の守る、古の光の力にふさわしいかどうか、確かめるためよ』

くすくすと笑うミハル。

トーヤの思ったことに対する答えを的確に与える彼女にどこか薄ら寒いものを感じた。

(この人、俺の心を読んでいるのか?)

『あゝら、心なんて読んでないわよ』

「え!?!? ……じゃあ、何で俺のかがえていることが!?!?」

『顔を見ればわかるわ。貴方わかりやすいんですもの』

かわいいわね、とミハルはくすくす笑いながら言った。

その様子を見てため息をつくセフィル。

「ミハル、遊んでいないでトーヤにこここの説明をしてやれ。」

『はいはい、わかったわよう。……相変わらず、頭硬いわね。』

ぶつぶつと文句を言いながらも、ミハルはトーヤにここ、闘技場の説明を始めた

## 第十六幕 battle

ミハルから聞かされた話はこうだ。

『まあ、簡単に言えば、ここは人間を試す試練場なのよ。』

人間と私が戦って、ここに封印されている力を扱える人間かどうか試すの。

だから、ここには試練を受ける　私と戦う人間しか入れないのよ。』

つまり、セフィルがいつまで経ってもこのホールに足を踏み入れないのは、そういう理由があるから、らしい。

「僕は手出しできないからな。……お前はお前の力をすべて出して戦え」

『他に質問は？』

「それじゃ、セフィルさんはこの試練、ミハルさんと戦ったことがあるの？」

その質問にミハルは首をかしげた

『どづいつことかしら？』

「特に理由はないけど、なんかセフィルさん、詳しいなって思っ

……」

『セフィルは、“私”とは、闘っていないわ。彼が試練を受けたのは別の祠。……もう質問はいいの？』

「はい。　お願いします！」

トーやは剣を構えた

『そう来なくっちゃ！』

ミハルはトーやに光の玉を飛ばした。

それを剣ではじき、ミハルに一撃を入れる。

『……ッ！』

ザシュツと、白いドレスが引き裂かれ、そこから赤い液体が流れ出た。

「あ、すみません！」

それを見て、トーヤは剣を引くと、ミハルと距離をとった。

『あら、やさしいのね！』

その隙の見逃さず、光の刃がトーヤの体を貫こうとする。

「うわ！」

間一髪で光の刃を避けたトーヤは、剣に魔力を貯めた。

「炎よ！」

アークから教えてもらった火の民の力。 剣に炎をまとわせて攻

撃する。

『炎ね……光よ！』

だがミハルは炎の剣を光の壁でさえぎった。

「……!?!」

光の壁の力で炎は消え、はじかれた衝撃でトーヤは後方へとんだ。

「防御魔術も使えるの!?!」

『防御魔術は基本的に光の力よ。……それより……』

「??？」

『貴方はこの試練の意味をわかっているの?』

え?と、つぶやく前に光の刃が飛んできた。

試練の意味?

ミハルと闘い勝つことじゃないのか?

「ちがうな。」

トーヤの考えを読み取ったように、セフィルは言った

「この試練はミハルに勝つことじゃない。 闘うことはそもそもお

前の技量を見るためだけのもの。 試練には他に別の意味も含まれ

ている」

「別の、意味??？」

「そうだ。 簡単に言えばお前は負けてもいいんだ。 死んではい

けないが、この試練に合格するある条件さえ満たされれば、お前は

祠に封じられている光の力を手にする資格があるということだ。」

ある条件

一体何のことだろうか？

ゆっくり考えている暇はない

トーヤはルナのみようみまねの防御魔法を使い、防御に徹することをにした。

とりあえず、自分の周りにバリアーをはり、考える時間を稼ごうとしたのだ

『へえ〜』

ミハルは防御魔法を使ったトーヤを見て、くすりと笑った  
『試練の意味が解ったのかしら？』

「トーヤのような馬鹿がそう簡単に意味を察するとは思えないが？」

『それじゃあ、魔法を使ったのは？』

ミハルはトーヤを守るバリアーを指差す。

「単なる偶然だろう？ それより、確かめなくていいのか？」

『何を？』

「あいつの力だ」

うーん、とミハルは唸った。

『もうちょっと強力なのを出してほしいんだけど』

はあ、とセフィルはため息を吐いた

「仕方がないな」

トーヤに聞こえないようにミハルと会話していたセフィルはトーヤに言う。

「トーヤ！ 一つヒントをやる」

「ヒント？」

「そうだ。ここは何の祠だ？何の力が眠っている？お前は何の力を取りにきたんだ？」

「……ちから？」

トーヤはつぶやく。

そんなもの決まっているじゃないか。俺は……

そこまで考えてはっとする。

そうか“そういうことか”

やっと、試練の意味をつかんだトーヤは口元に笑みを浮かべ、意識を集中させた。

これが俺の全力だ！

あたり一面、光に覆われる。

光が収まると、ミハルはホールの結界を解いた。

『合格、よ』

## 断章 精霊との会話

急に動かなくなったトーヤにミハルは首をかしげた

『どうしたのかしら』

様子を見ながら距離を縮める

いくらか縮まった距離を見てトーヤは剣を通して地面に魔力で魔方阵を作った。

「俺の光の力を見てみる！」

カツとあたりが発光した。

魔力を開放するなり倒れてしまったトーヤを見てセフィルはつぶやいた。

「驚いたな。こんなに強力な力を、内に秘めていたとは……」

『ええ、でも大丈夫かしら』

「大丈夫だろう。さっき診てみたが、疲れて眠っているだけだ」

『ならいいけど』

安心した様子のミハルにセフィルは問うた

「それより、だうだった？」

『どうって？』

「トーヤは光の力を……」

セフィルの言葉にミハルは『ああそれなら』と笑顔で言った

『十分に素質あるわよ。十年前もそうだったけど、貴方ダイヤモンドの原石を見つかる力があるのね！ 今度、隠れ鉱山を教えてあげましようか？』

「言ってる。」

ミハルの軽口にセフィルはくだらないとでも言つように顔をそらした

『いっぱい見つかると思うんだけどなあ』

セフィルに聞かれないように小さくつぶやいた。



## 第一七幕 光の力

『これで完了!』

ミハルの声とともに目を開いたトーヤは自分の体を見た

「何も変わっていないみたいだけど?」

「そうすぐに何かが変わるわけないだろう」

自分の体を触ったりつねったりして、どこが変わったところはな  
いか調べているトーヤにセフィルはうんざりしたように言った。

「光の力を手に入れたからといってそれをすぐに使いこなせるとは  
限らない。」

「じゃあ、どうすればこの力を使いこなせるの!?!」

「……アークは確か半年くらいだな。一日8時間の睡眠と食事、風  
呂やトイレの時間を除いて、ほぼすべての時間を修行につんで、だ」

「………そんなにかかるんだ」

トーヤはがっくりと頂垂れた。

人生そう甘くはないものである。

「お前は若いから、それくらいはあつという間にできるぞ。」

「………なんか年寄りみたい。」

「お前よりは年上だ。」

……外見年れいはあまり変わらないけどね。

そう思ったが、トーヤは口に出さなかった。

そして、祠から帝都へ帰る途中……

自分たちの周りから不穏な気配。

「………モンスターか。」

冷静にセフィルは言うが、その数はおそらく10、いや、下手を  
すればそれ以上だ。

「セフィルさん!何でそんなに落ち着いているのさ!」 武器を構

えてよ」

「いい機会だ。ミハルからもらった光の力を試してもらおうじゃないか」

だから、一人でこれを何とかしろ。

そう言ってセフィルは木の上へ身軽に飛び乗ると、そこから高みの見物というような姿勢をとった。

「あ！セフィルさん、ずるい！！」

「何がずるいんだ？」

「手伝ってよ！」

「口を動かす前に手を動かせ。」

でないと……

セフィルが言った時モンスターの鋭い一撃がトーヤを襲った。

「うわ！」

間一髪でよけた。

トーヤがいた地面を見てみると、深く地面がえぐれている。

サアーっとトーヤの顔が青ざめる。

「……下手をしたらしぬことになる。」

「もっと早く言っただよ！」

言いながらも、トーヤは的確にモンスターを倒していた。

そしてモンスターと距離をとり剣を地面に突き立て、集中した

「おれの中に眠る光の力よ……」

小さくつぶやくと、地面に巨大な魔法陣が現れた。

そこから出現した光の刃が、モンスターの体を貫く。

最後の一匹を貫いたと同時に魔法陣は消え、トーヤは膝を折る

「はあ、はあ………なんとか、全部………たおし、た………よ」

自分の顔を覗き込むセフィルに、トーヤは得意げな笑顔を見せた

「………まずまず、と言ったところか」

「ちえ、少しはほめてくれたっていいのに」

「甘ったれるな。これは力を無理やり引き出して爆発させただけにすぎない。ちゃんと制御できないともろ刃の剣になる。」

「“もろはのつるぎ”？」

「そうだ。簡単にいえば、さっきのように魔法が発動したはいいが、発動後、体力の限界で倒れてしまう。もう少し魔力を抑えろ」

「えーと、こう……かな？」

トーヤは自分の掌の中に光球を出してみた。

「……こんな感じ、かな？」

「そうだ。そして小さな力を複数出す」

「ふ、ふくすう？」

「まだ無理があるだろう。 とりあえず、さっさと戻るぞ！」

「はい！」

トーヤは先に行くセフィルの背を、疲労のたまった体にムチ打って追いかけた。

断章 Witch (前書き)

番外編です。

この話は読まなくても大丈夫です。

## 断章 Witch

トーヤが祠にいる頃、ルナは……

ルナはラメドの紅一点　　サラに呼び出されて、首をかしげた案内された部屋で待っている間もなくサラが来た。綺麗に結い上げられた薄桃色の髪は素直に美しいと思うし、サラ自身かなりの美女だった。

目の前で彼女になつこり微笑まれたルナは一瞬固まった

同性から見ても綺麗だっと思う人と一緒にいて普通で入れる人はそうそう居ないわよ！

心の中で誰に聞かせるでもない言い訳をしていると、サラが口を開く。

「確か、ルナちゃんはヒーラーよね？」

「あ、はい」

ルナはうなづく。

ルナは基本的な魔術は大体使えるが、実際一番得意でしかも主に使っているのは治癒術だ。ヒーリング

簡単に言えば、味方のけがを治したり、攻撃力や防御力を上げる援護の術、他には結界などを張るのが彼女の得意分野だ。

だが、サラはルナの言葉にやや眉をしかめて見せた

「本当に？」

「基本的な……下級術と呼ばれるものはあらかた使えますが……」

そうと呟き、サラはまたしばらく考えてから口を開いた

「あなたは、自分の血筋がどんなものか知っている？」

「え？ いいえ」

「両親の職業とかは？」

それを聞かれてルナはその幼さの残る顔に暗い影を落とした。

「……幼いころ、私はトーヤの住んでいる村の近くで倒れているの

を発見されて……その時私は自分の名前以外のすべてを忘れていたので、……わかりません」

「あ………そう。……ごめんなさいね。こんなことをきいちゃって……」

「いいえ。」

ルナは首を横に振るとやわらかい表情を作った

「トーヤやコウ八にアークさん、玲さんたちは私によくしてくれているし、私自身今の生活を苦しめています。……むしろ、今の生活をとても幸せに思っているから………気にしないでください」

「……ええ、わかったわ。」

サラは頷くと居住まいを直し、まじめな表情になった

「単刀直入に言うわ。あなたは魔女の血を引いている。」

「……魔女？」

「ウィッチとも呼ばれているわ。意味は賢い女性。」

「……えっと、魔女って何ですか？」

「簡単に言えば占いや薬草作り……あとは呪術なんかを主に行う女性として知られているけど、私たち魔術師の間では魔女は魔法のスペシャリストとして扱われているわ」

サラの言葉をどこか遠くに聞きながらルナは頷いた。

その様子のルナに「まだ実感が無いようね」とサラは言った

「実感が無いというか……、どうしてそんなことが分かったんですか？」

「簡単に言えばあなたからフィンやフォンとよく似た匂いがしたから、かしら？」

「ニ、ニオイ!？」

ルナはあわてて自分の体のおいを嗅ぐ。

その様子を見てサラはくすくすと笑った。

「そうやってわかるものじゃないわよ。匂いってというのはあなたの纏う魔力のことをさすんだから」

「え!?! あ、そうですか。」

急にルナは恥ずかしくなり、サラから顔をそむけた

そしてどうにか話を別のところへ持つていこうと頭を回転させた

「……えーと、フィアさんとフォンさんは一体？」

「え？」

「その、どうして私と同じって……」

「ああ、あの二人は北国の氷の魔女の末裔なのよ。……って言う

てもフォンの場合魔法というより、魔力を刃にまとわせて使うって  
いう戦い方しかしないのだけれど……」

「へえ……」

「あなたの場合、自然界の力ほぼすべての魔術を扱う高度な魔女の  
血を引いているみたいね。それも色濃く」

「え？」

「簡単に言えば、治療術以外にも他の魔法も覚えてみないって誘っ  
ているのよ？」

「ど、どうしてですか？」

「せっかく帝都に来たんだから、それくらいしてみない？っていう  
のが表面の理由なんだけどね」

「……？」

「本当は私も弟子がほしいのよ」

サラの言葉にルナは首をかしげた

「フォンはともかく、最年少のセフィルまで弟子を持つことになっ  
たのよ！？ 実をいうとラメドで弟子を持ったことがないのって私  
だけのよね……」

「そうなんですか？」

「そうなのよ！とサラは続けた。

「女っていうこともあって、なめられているというか……男のプラ  
イドってことで男性の兵士は私に魔法を教わりにくいみたいだし、  
女性の兵ってなかなかいないのよね。居ても大抵頭脳労働。私の出  
番がないのよ」

「は、はあ」

「……ということで、ルナちゃんは私の稽古受けてみない？」  
ルナはコクリとうなずいた  
今は平和だがこれから何がるともわからない。  
ルナは喜んでその話を受け入れた。

## 第十八幕 レントの修行

ようやくラメドのメンバーのいる屋敷に戻ったトーヤは、やっと休めるとほっとしながら門をくぐった。

その時

シユッ

「うわ!!」

何かトーヤより一回り大きいものがトーヤの前を飛んで行った  
ドサリ

門から100m先くらいに落ちたそれは

「コウハ!」

まるでぼろ雑巾のようにズタボロにされたコウハだった

「一体何が……」

呟いた瞬間今度はコウハの片手鎌が飛んできた。

幸いそれは、トーヤの前髪を2〜3本切断しただけだったが……。もしこれが当たったらと考えてしまったトーヤの背筋を冷たいものが走る

「何をやっている。立て!」

そう言ったのは、長剣片手のいかにも真面目そうな青年、レントだ  
「れ、レントさん?」

トーヤは足元の目を回して倒れているコウハを見た。

「えっと、どういうことですか?」

「稽古だ」

きっぱりとレントは言った

つまり彼との稽古中に、コウハは吹っ飛ばされたようだ

「……いくらなんでもきつすぎんじや……」

「いや、今日はまだ優しいほうだ」

トーヤの言葉をさえぎって、セフィルが言った

「確か最短記録は30分だったな」

「何が？」

トーヤが聞くとセフィルは、世間話をするような軽い口調で言った  
「レントさんの弟子になって辞めた人」

「たった30分稽古しただけで辞めたの？」

トーヤは驚いた。

一体、どれだけ厳しい訓練を受けたのだ。コウハは！

「いや、今日はまだ優しいほうみたいだが」

「嘘！」

これだけズタボロで優しい？

セフィルの言葉にレントはほお……と呟いた

「こいつの状態を見ただけで、わかるとは腕を上げたな、セフィル。」

「……毎回あなたの訓練を受けてズタボロになった兵士を、回復させるのは僕やサラさん、フォンさんの仕事ですのよ」

「今月でもう10人以上やめていったからな。今回はそれを反省して優しくしたのだが……完全に伸びきっているな」

レントはコウハを見て、軟弱者めと呟いた。

そんな彼に一言

「それはあなたが尋常でない体力の持ち主だと自覚してから言うてください。」

「尋常じゃない体力？」

トーヤは首をかしげた

「この人にとつてどんな断崖絶壁も、そこら辺の山を登ることと同じだ。」

「は？」

「フルマラソンを2時間以内で走り切って、息切れ一つせずに“もう終わったのか、もの足りない”なんて言った人だぞ。」

「……嘘」

顔を引きつらせるトーヤに一言

「本当だ」

そう言ったのはレントだった。

彼はしかしと続ける

「俺よりフィアのほうが厳しいと思うが？」

「否定はしません」

レントの言葉にセフィルはうなずく

「いったいどこまで厳しいのかと聞くと、レントは簡潔に言った

「今まであいつの修行を途中で辞めなかったのはセフィルだけだ」

「……………厳しさの凄さがよくわかりません」

セフィルだけというところ……………いったいどこまで厳しいのか……………

セフィルは過去を思い出しながら言った

「出だしがフルマラソン、そのあと魔術の訓練。腕の力だけで5mの上り棒を登るという訓練もやったな。そして2時間程試合をして、素振り。ここまでで午前中だ。午後はまあ、時と場合によって違うが……………だいたい午前とあまり変わらないな。あとはレベルの高いモンスターの森に一人置き去りにされたりもしたな。」

「……………よく生きてこれたね。」

トーヤは同情の眼差しをセフィルに向ける。

「真冬に薄着で訓練したり、真夏に分厚い防具をつけて試合したり……………本当につらい毎日だった」

なんでも、フィアの修行はレントの修行のように速攻で音を上げて辞める人間よりも、だんだんきつくなって辞める人間のほうが多いらしい。

「修行つてつらいんだね」

「当たり前だ。つらくない修行は意味がない」

セフィルの言葉にトーヤはこれからの日々を思い、溜息を吐いた



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6272r/>

---

預言と運命の詩      光の章

2011年10月10日03時26分発行